園先

菅原家

へ13
1456
4

へ遠13
1486
4

渓流の無病庵鶯と和歌を論ずる事

野外人事罕にして深巷輪鞅寡し崎嶇乃奥小草を披て蝸廬をしめいまゞ不惑小盈にして生業を捨るあゝ私ど性虚弱にして平生多病なる小世事をいとひ水を愛好し情を放て酒を痛飲し礼俗よ多ふていい病と称し意中此友よ對して世と病庵と号けるものあり肉を銜て頼然として醉をふし言語林薮まれよ良木あるを択て剽軽游恣乃徒常よ汚ふあり庵主和尚の及をたゝ丹を承光をゝどてくゝやつを少をゝ如一日奚乃うらゝかあるゝ小ふゝ〻かゝて机下よ随ふ爰一とふゝの一指

を携て幽棲を訪ふ庭中に菊水を穿て歯ある老僕の藤三
とゝゐるあり主客一人ふつまて先生在庭やと問ふ僕近て客主の
醉臥してあつまるかゝ宅告れいやをゝ枕をはゝひ肱を
ゆげをまばゝ客一ちかゝ生てみ先生此客を迎るせゝい恐
いへとゝかゝる奥を市中にうんもなく来たるゝひとゝふいるを来を
も窺ひまいゝせんゝめ客られ一酒携ゆゝ席上にを出
庭を芝元ふとゝて今ふはゞめぬ客一ぬゝ乃芳志と謝ゝ
やがゝ僕ふ命じかの酒をあゝめ此ようゝ鍋子牽
子やうゝとの調じたる美をゝゝき相對して数盃をかゝ
ひけ藝談やゝ闌なる比机上ふ古今集の巻を取りて
庭主ふ向ひ貴之乃歌ゝ古今ふ絶妙なるを称賛ふ庭主

眉をひそめいやとよ欲ふ云業をもふゝてゝをやるとのあり響
をゝよふ事をるとの此とのふつけていひ出せるなりとのゝ
いひていあるゝゝさん古事記日本記等ふ云る伊耶那岐伊
耶那美命ゝ阿那迩夜志愛袁古袁あふやゝえ
をとめをと唱ふるゝよふ事をいひおせるゝ乞をのゝあふ
といひて欲しいとゝるゝたゝ唱ふるのゝあまびあり素嗚尊
乃八雲ゝゝ此のゝ歌ひゝもゝよふ事をいひ出せるあれど乞ゝ
まゝゝ欲ゝいるゝゝひをゝるふまびなるべゝ又火ゝ出見るふ
いゝりていゝ玉姫と結答乃歌あゝとゝもゝ云をやらんゝめふ
仰ゝてゝうひをゝふ和をゝふゝふ小姫ゝふあるべゝ後世男女
お関ふ分を出てお結ふふいなるべゝ後世附世ふ調花云業

を敬ふ附ふ所ならざるべからざれば風流を揮ふる歌学し
て優芳を掩ずして幸ひなるかな生るかまあせて
うるひるを待へるをとなへるをさまば歌の勢ふる六義に
歌よみあるべきる歌日用雅行する助るあるや君や天地を動
らし鬼神をかんぜしむるとのべまぞやいつこいまぞあきら
めば男女乃中をおだやかさるるあまをど動て淫奔の媒とや
あるべし花鳥風月よりも増乃ようまんいもれいあるべうば
たゞ詞花集を敬ふ為ら既ふ日本記古事記乃系譜は歌
のごとき貴ふ物ふいとゞ古今集よりこゝろ詞林除盛
の附よ玉て出る巧拙を論じて優ふるを考へ風姿花艶
ちるるの為ふ意味乃深長ある連續性の機巧ちるを慎ひて

て優者を定むる是を慎ちるべしこれ乃論ふ根
を概て実を食ふんと欲するものあるべし味ひ
是下ものひて童蒙を教ふ一助もあらんす
の結ぶ古より見立里花ようて古今のよみ歌の主遠
て見へあるべきちる分をも考へる書き歌仙のよみ分れやう
よ見へ遠ひるある玉見ひづるふまあせひとり二ヤさん世界
小野小町ら雪花ようとさりとてまるなあう下を斗を人
くつて家集ふ為を考へる
ふ玉振神ちゆまきはるちきて花川戸の宗ちあけ
られ
仁徳天皇花御製として民の加護ひたまひよりとなる

延喜日本紀竟宴歌　天皇を

よみてたてまつる

雲かゝるよはのあけぬるかとよりたなびくてゝ

うゑのうり　つまとゝもみゆる

謠曲ふるのしるとのいふ所もあり　紫式部住吉社に詣て

乃時のさゝやかとゝる　高砂家もあり　ものいふこゝろ　江口遊女

白雲似帶圍山腰　青苔如衣負巖背

こゝ衣きるゝ　こゝ衣ひろきゝ　山に苔するゝ

うゑ都在中花有

源三位頼政怪を射し賞鳴小菖蒲前を　あやめのまえ

よめるおのりうゑ　ゆ　名集より　源今昔　右大臣家都より

菖蒲とゝるゝ　ふるゝ　橋系　系附　三男三郎勝

射系義　系至　時より

きゝとまあるゝ　ぬまに　ぎゝ　なびていづ　あやめと

かくよみすゝ　ばやかて　生まつ　ひさぐ

右四月灌ぶ　持して　さゝ　ふ　あひて　織の女　蓑　ひる

小衣　ゆ　山ぶき　花一枝　をりて　出せる　同一事　結

後拾遺集　云小倉　家小　すみ　結　ふ　ゆ

日蓑かる人のまゝ　ゝ　山吹　枝　ゝ　せ　結

ゆ　えゝ　まる　て　又の日　山吹　ゝ　え　ゝ

いひ　こせ　る　ゝ　ゝ　兼明親王

七重八重花はさけども山吹のみひとつだにあきであやしき

又左藤の家草義京集小康正元年の冬義沢の軍小敵
小条憲定ぬしつひよ自害し敵名ハ高沢栗毛なる弱
小の馬二ツ引あ小昇殿れ級つけたるさしものあるを味方時
治新少輔義京主新首をとる時左藤
かゆ時さこと今九年わかめかなてあ九分と云ひ高沢ハ
主新ちおあ〳〵かゝあん
小新分ハ牛蒡を高沢小屋小おゝぶ事を恐
かる時の分を世よ左藤辞世とひてくさりこと高のう
高〳〵さまばあ王かうやうのゝびあまゝ結り人九のほの
〳〵と脱兵ゆ小駐れ望ありとゝかよゝる説もゝゝ王
とかるゝ小義一ゝゝ小ゝ嘗をうち奇言妙義のかゝり

あきを感し諫小先生ハ時言園夜小ともしびを点
ゝちしまゝ王と結ふるかゝ王おくやかて盃をちさめ
宮をあゝため別を乞へ高主も庭あれ桃花満開の日
いかあゝゝ草をゝけの今ゝ繋てまれぬ高主ハ此よ
ゝあゝ高ゝ蕪淡小琴をさんゝこちよく辞いぞきあ王ば
兄乃桃ゝよ也てハちかゝ雲風小新を吹せ廉ゝとの
義せよゝくゝあよりたやゝく春入ゝ王時小庭あ梅花頻
小白ハ美貌ハ少女忽然ときゝゝ高主ハ桃ちかゝゝ
高主酒てゝハゝりゝ月あ王ぬか女ハ何事ありて来きる
やゝゝふ少女のいゝく主ハ先小松あの左を海しゝゝ小
よりてゝものいゝんさあ小来ゝゝりあるゝ小みゝゝ王小松あ

の石をもつて至誠仙をあざむく初めは詞花玄象を
弄ぶごとくなれども人界のおかす欲より起り
ものゐきとなつて人生て靜なる天の性なりものゝ
感じてうごくは性の欲なりほつ出る事あまたび
なきすなるゆゑなるゆゑなるゆゑなる時は玄象なきゆゑなる
まことに附かおけるや天氣下降地氣上騰互地和同
爰木花動ひさきばこの陽氣よ感じて東風凍
をとしてき蟄虫ーめて振ひ梅花ひらき柳緑をなす
爰うゝひ堪うゝふこと至をもこれを生じて時ようゝ欲
小つゞる乾天地より人を感ぜしむるあり人もまた天
地をかんぜしむる事なるかんや唐土にて玄宗長

なるゝめば爰堪の欲をもて生べし將吳國は戴封
といふる人女を色よりゝひ彩を検て上小望して自
樊噲といふる附大雨暴よ到ることなれども志は伝より天小義
なるなり小町能因ゞ女をこひ慕会の右大臣は女をこひ
も赤人は諭より天帝よ祈あんでよみ称は巧拙小よるべ
き民は嘆を修よ嘆人は和むるべく女を降ひこれ天地
をうごかひ小あひや男女乃中をやゝげたきことの
ふれんをもあくさもるとい昔も今も虎の事あり雄畧
天皇は佐ところけしくまもるを分てやゝ
まゝ高城の大きみをこちはゝ
おろを小ありとてまうけあんどを至々を少すもあり

くさ八宋女ありて男女ともとりてあるものゝ中をいくゝる何ぞ遠莽れ蝶とあるとゝけふるゝゝ人の中をいくゝる何ぞ遠莽れ蝶とあるとゝ
だあるまいもんや男女れ中いかりとより天地の左理まくく松あ乃
乃ありてのちれさくよはゝゝ沒あふかち同花玄素れまてあた
びとのゝをもとする罪わわれ寺漢神もすーたまゝ沒將て
まいまとのあほせごとゝるまてまいりくくとふりそうく後
より墨華れ後しくる武者之那乃王位の沉乃あん神の呂
ありとくまつまとゝ小朧ひきたて荒敵とあげきくゝ引
曲き彼ゝち像よあつまてて船よかき宗せゝゝへくたる大海
乃神をさしてもくる左之八面去れくくふるひまるくき
さるとゝ中せゝいやつゝまかゝ僻説とあん神乃いかりのふい

さる事あかゝゝ今はかまへ助けゝと船底よ伏てゝぶ
れゝゝ涙をれかゝよりゝ小ふ帆をあげてこゝるされをを
めみて漕来るあ王猟長たるものこえやつそ女よ
むゝ姑射神人と九老仙乃ゝのふとふ女れいまくくす
やうそ行ん井芸帝船をとゞめまとふちかゞき
ゝ尼ゝ子ゝき義れ白髪をみゞ才ふ白衣をまくゝ
るゝ舵をとりくゝまゝ今ひとゝゝ乃ゝ氷壽ゝてお船
ゝるいゝき人乃ゝゝゝぬ白ひ赤ゝき練被ゝゝ御が
ふてゝゝやゞて船をよせれ船の人ゝゝれ女よむゝいふ
鉄壹のぬゝゝ別くゝ船のゝゝゝさんゝゝゝゝゝ病者
ゝゝ乃れ海無荒凉ゝゝゝゝゝ偶中まゝ理れ

とる不あり欲かきしけるを研求するれとろさしわさ
かゝざるべあり旦夕鄙を探つくうまあおのつら
花鳥を愛好し世をあれ信いるぬしれ家校ようひふ
古井芳亭れ水庭ようひのふをもつゝふよそふのこ
咲て情をゝ〳〵で高仙んあるゞ家ため不旦よへ根す
水をゝ〳〵きタよつ〳〵き花の風をいふ毛芳情ゝすをかゝ
九老作の云烟れ私をひく〳〵来乱よかほをれ帆をのけ
まつゝゝり位の紅れもほん神れいかをゝあしたちかすもつく
らひのひまげてあるゞをあかゝびのへとりあよ九老作を
よべる霞もゝ〳〵云ゝあるかかを面をやつゝげ少童経タ
足下れ枝を窟ゝさゝあめ晴ゝ云及をを傳ふゝふ

ん之ふ毛衣を志のゝくまゝ九老作いみよりれよりの〳〵山ふ
ゝちゝふあゝたより谷れてひづる少童ふもとふ和おれ鉢鄙
小おゝゝあをざる中ゝのれば何ゝいるみヤゞ〳〵ヤ〳〵一月ふ
笑ひをあゞるとあゞほへて唐を忙然として美さめゝりな
ゝををゝまば延あれ梅花笑るかゝゝ皆語ゝまして
弁林ふゝゝさり堪藥ふ投して水ふ高あり池水よ抑れ薬
玄風ふめゞ居ハかの松ら晩澄をゝひゞき高山の腰よ横ふ
ゝるハゝを九老作や姑射神人ゝゝるいゝも樹の梅ら僕の
廉之をよひて例のゝゝ根よ水を灌かゝめて醉醒
をつゝふよをゝ〳〵忘れすゞをおゝ〳〵ゝめ無

うる野村の農夫小肆毛人の霊魂ふあふ夏
紀伊國宮地の乃小小山あり峯峰崖高く数丈れ松檜百丈の絲
をもつて懸掉すつ攀ぶ小縁を矢へ登れ山人乃登る事あまば
たちまち鳴動し樵夫たまく境を失ひ木を伐ハ出ふて
疾をなのれと云つて人里村の民ふ乃ちものかりをもてよ
る地村ふ貞二と云る農民ありて幼すして父よ母をもたる
母ふつかへて孝あり家貧く人のあよ室を数里のあ
小負乃備してもつて母ふ肉をもてあおのま六藜ふ蕨を食
母久しく病よりみて起臥自立ならざれば貞二侍養
ておたたび夏ふ稼さんとてもつるふ疾もやうちち
ちなり待るに貞二よむひ日れ久しくやみて食よ夏

味をあぶ乃あかき山鳥れ矢なくば可なりんとつふよ貞二
いとやすれ事あり〳〵かたにまちを鳥毛者ふ人まづしき
我家ふも旌山乃関守あり〳〵みを未弓ハ持ぐをとてやがて
矢をとりてあたりみ日に赤きる山よりもを乃ちを
も神世母れ乃のもを矢毎ひしたる弓れを小山る
乃母を懸てや月れをとふ
を失ひとりかちかちを
あるこ労を岩りれすつ
ちばく休ひる小向れ松樹のもげを小久日れ光さ入
て山る乃ありくと校小尾をくきて乃ふをとのぶたり
ふりざりを持〳〵矢ちを歩ようん弾小射て

ぜんぜばあやまりてねをつゝめいて落らうたやくち
とまてうゑ拔びうゝげ母人乃い小結つゝとんをくまゝ
木の根岩角れいとひなく忙あめぞくあまりゝ小山原くゝ
るゝ日ハ出れあるゝ流ゝ木蔭ほのゝくく日ハえゝるゝ
想石をうゝなひゝ刻蹈ゝとゝろよむゝだちゝる杉の
かげようゝ嫌火とゝぶゝく物ゝぞる小真二巡るきこハ鳩魅の
ゝめふおそつまるゝや側の神社山よ遂ひ入ゝるゝやと安き
とゝ誘もなくて行んとす半ば真二ゝ光陰移りて正おて
ゝゝとゝひゝがゝゝえかまばこハいかよ今やうふゝゝぬ紫光
冠をいゝぐき才小あてなる形ゝる未ゝをまとひゝる貴人乃
忽然とゝてゝう真二才姿ゝゝて神乃ゝでまゝゝゝふ

水ゝゝゝハ地上よ伏て跪ハ貴人いと幽ゝる者ゝしていゝく
汝正直ゝして孝順なるふゝう今ゝ仔細ありそゝく家
ハ山ハ地下小安居せる事ゝ多ゝあるゝ小樵夫物人小ま
みゝゝふ古ゝをもつて汚穢する事ハゝゝゝゝ穢
ものあるまゝ小ゝハ疾をもつて苦るゝ者小ゝりゝあ
ハ山人ゝ治まれなるゝとゝ孫ゝ海幸ひ今日ゝゝ小来ゝ家
法憧寺ふゝうゝて住んゝのを彩ふ海明具ゝハ小来ゝ
地上を踏て初ゝきまゝ文をあきゝるゝをゝすけて
かの精舎ようゝせ永まゝゝ天武の帝ゝつかへ壬申ハ乱
ゝゝハゝく勲功あるをもつてあまゝ貴嬪よあづかる内
ゝ對馬ハ国人小帝ゝ来ゝ白銀ゝのまゝゝゝびたる

をうゝ慥あり汝が孝をめて旦へ家をうすりてかの精
舎をようゝ学よ教へんとぞ〻ねさんべしかるに
約を遠へ今いとくかゝる貞二をあらうち伏て
諸ー改をあけてえきば本よりの名舟よりかげより
かゝるとのふー貞二偏ぬれ行をぬぐひ点もつきのくび
いちはを出ーて山をとりてかからずて家ふかく至母よりかくとも
云いでかの覆をの綱ーてきめあぞーいとを伺ひて
法情を示ゐて当寺法師よ告をかゝるはふ別
石恵ーていくこきあるに故人の遺骸をおさめー示
あゝん永も仏よ約えんと約ーすでふ昭旦よりあり色へ
当寺法師貞二をてきよたゝ村里社農夫を催ー

かの山社まれあをうけて樊をのぼる貞二はふーへ乃而よりて里
鋤て地上を踏ばゐぶき言葉ばる示ゐの至名寺当寺農夫示を
ーて掘ーめるる数尺ゐて石棺あを蓋をとりてうを
い弥とあがきむを破きたるをのよまつりきて白骨ある
かゝるよ金牌一枚あゝ当寺地よりかを名をうちを
を上示安ーてこまをゝ面小乳鳥浄御原宮治
天下天皇御朝任大政官兼形部大卿位大錦上社子を
裏のあをて示小野毛人朝臣之墓営歳次丁巳年十二月
上旬葬之乃字なを刻毛人乃墓ゐをを示を村
民をゝめて此山乃号動をる由縁をきりて舌を振ふ
まをかゝるよ銀をとだく壺よをてり当寺貞二

小さゝしめていろ〳〵物を貪欲してよく親をつくして
孝なるかゝよりて老人の郷れさらみをふ不さぐかるてと
と根の壺をとゝしめらづかゝ白骨をおさめ金牌と
ともかゝ伝ゆ衣よ纏ひ力辰夫ホを辛ひて山を下王法憧憬
舎よかゝらとおほく此俗を信ゝ追福のため誦経をいと
あむ事数日あり貞二八さかゝげる幸ひを拾て暴富と
とゝり村里の窮民をめぐゝ代ゝ豪民ゝゝ子孫栄へけ
りとゝ

圃老菩提菊道雪第四巻終